鼓の胴の松飾り（つづみのどうのまつかざり）

1637年（寛永14年）、島原・天草のキリシタン農民が蜂起し、原城跡に立て籠もると、江戸幕府は西国の大名を動員して、翌年の1638（寛永15年）に島原の乱を鎮圧しました。

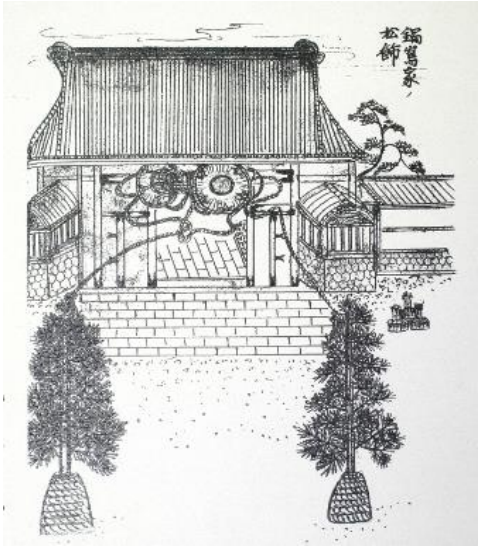
佐賀藩では、3万5千人を島原に送り、鍋島勝茂の三男直澄（のちの蓮池藩の初代藩主）が大手、長男元茂が搦手の指揮をとりました。勝利のきっかけを作ったのは、佐賀藩の一番乗りの武功でした。

しかし、そのことが抜け駆けであると逆に軍令違反とされ、同年6月29日、鍋島勝茂は幕府への出仕を止められ、謹慎処分を受けることになりました。

ところが、年も押し迫った12月29日、突然、この謹慎処分が解けました。質素な正月の準備をしていた佐賀藩江戸上屋敷では、門松など正月飾りは用意しておらず、困惑してしまいました。そこで、かねてから出入りのあった出雲屋庄兵衛に、松などの材料を集めさせ、米俵などのわらを使い、にわかに松飾りを作らせました。その松飾りの形が鼓の胴部に似ていたことから「鼓の胴の松飾り」といわれるようになりました。この松飾りは大変評判がよく、佐賀藩江戸上屋敷で飾られていました。

佐賀では明治時代、佐賀県庁や佐賀市役所に飾られたといわれています。

その後、佐賀の伝統的な正月飾りとして地域に継承されることとなり、その継承者である「鼓の胴の松飾り保存会」に、本館での飾り付けに御協力いただいています。



（『幕末下級武士の記録』吉田常吉著　時事通信社）

- 橙（だいだい）　の意味…「だいだい」の読みから代々栄えるという縁起を担ぎ、用いる。
- 楪（ゆずりは）　の意味…ユズリハの葉は新しい葉が出てきてから古い葉が落ちることから、親の代から子の代へ、子の代から孫の代へと、順々に世代交代する願いを結びつけて用いる。
- 炭（すみ）　の意味…黒が邪気を払う色とされるからとも、読みを「住み」に通じさせて永住を祝う意からともいう。
- 南天（なんてん）の意味…「難を転じる」という願いから用いる。